

【片瀬小学校パソコン教室 視察所見】

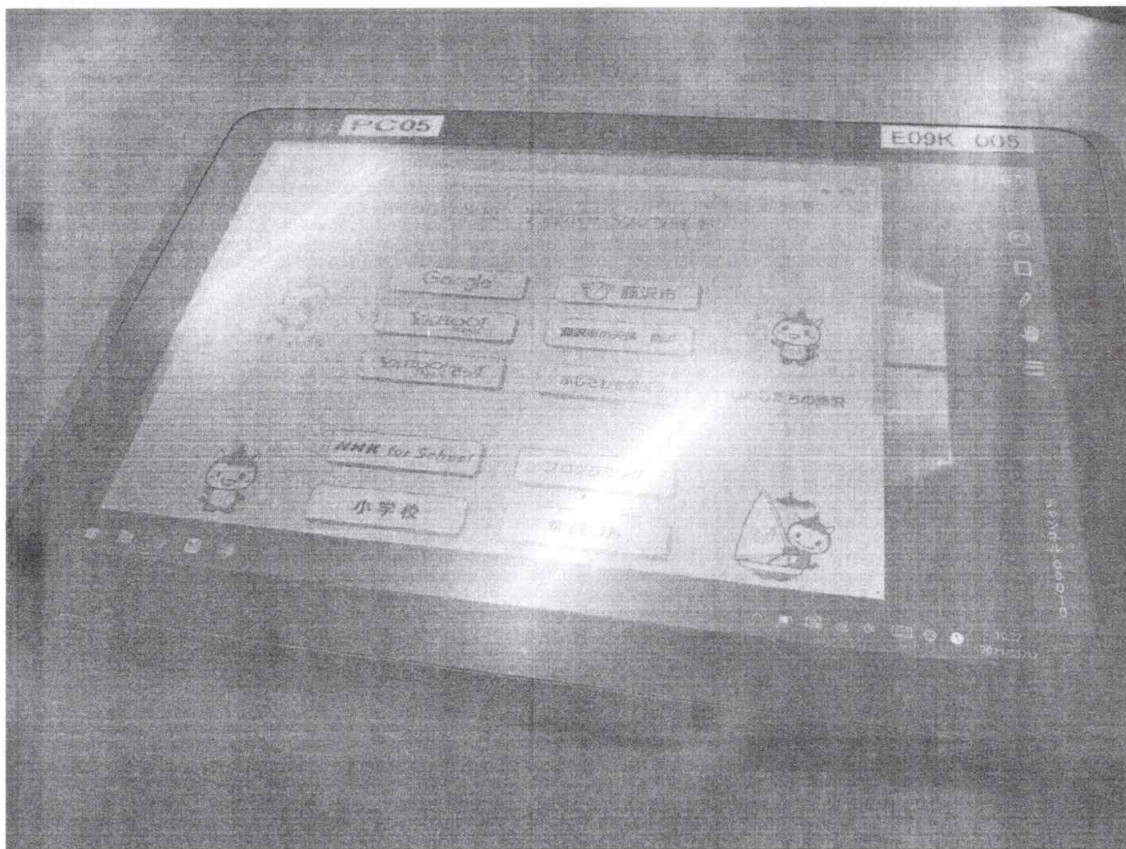
報告者：杉下由輝

日時 2021年11月12日（金）

授業 1年1組 2時限目

所見 ①全員がログイン完了時には、授業が終わっていた

- ・反応が遅い
- ・反応しない⇒再起動

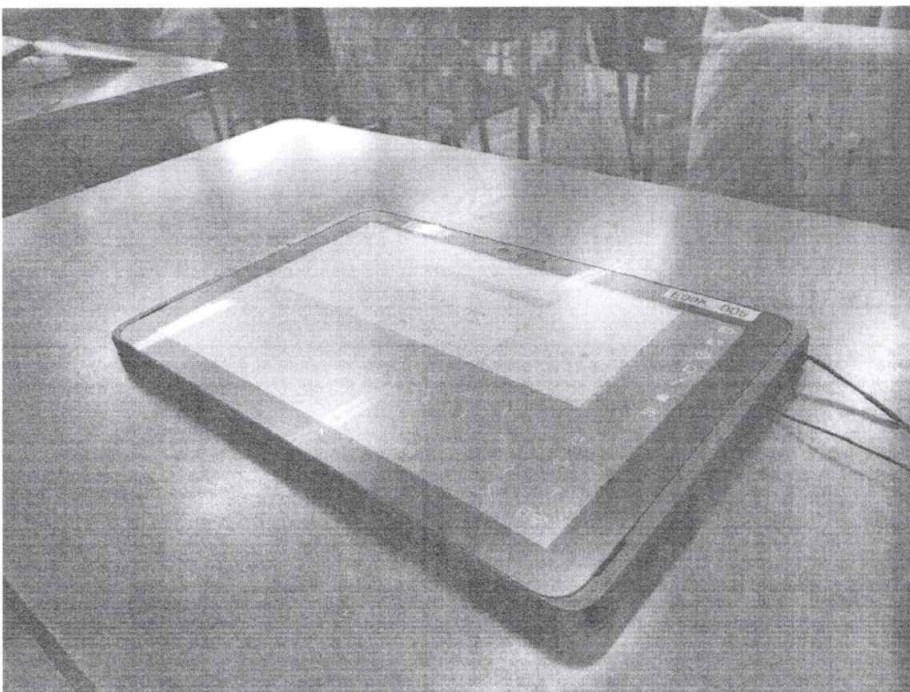
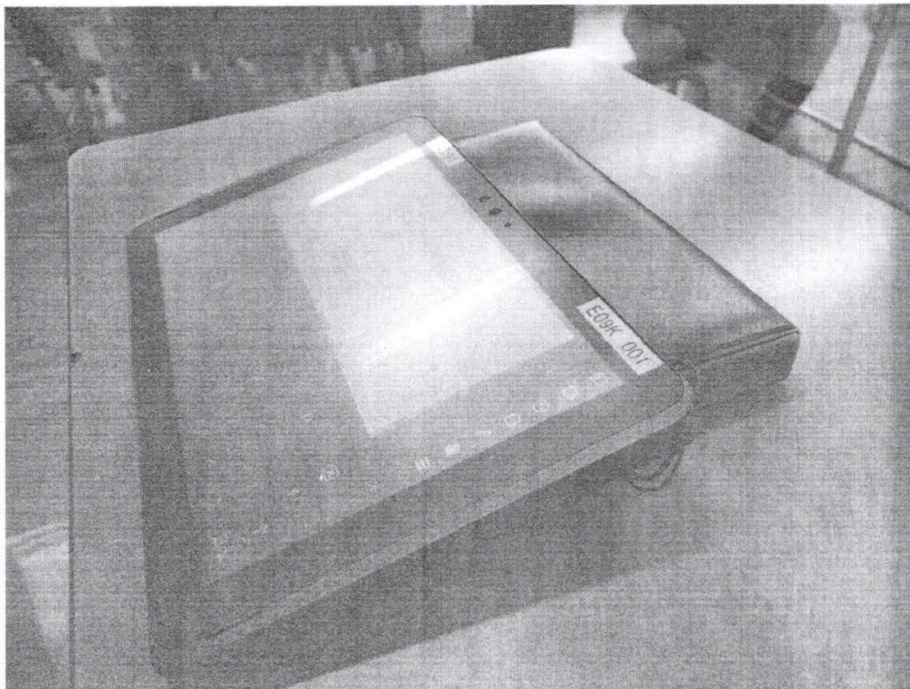


②アルファベットが読めない 例) r : アールと言っても分からなかった

③パソコンに太陽が反射して眩しい⇒カーテンを閉める

④パソコンを斜めにする、台が必要 ※筆箱を台にしている

※教育委員会で一括に用意するか？ 工作授業で、作るか？



片瀬小におけるパソコン教室支援(2回目)

1. 背景

文部科学省が推進するGiga(ギガ)スクール構想の下、片瀬小学校にもパソコンやタブレットが配備され、児童生徒に向けたIT教育が開始されている。7月6日(火)に現場を視察し、9月9日(木)に1回目のサポート要員としてパソコン操作支援を行った。

2. 課題

操作支援を通じて、課題も見えて来た。講師役が随時生徒の理解度を確認しながら授業を推進するも、特に低学年の児童生徒においては習熟度のばらつきが大きく、また興味が散漫し多様であるため、一つに集中し続ける難しさがあり、先生は理解不足や操作不慣れにより授業が中断することを前提に進めなければならない。このため、40名弱の児童生徒に対して同じ内容で、同じ速度で一斉に授業を進めることは困難な状況下にあることを理解した。

3. 対策案(前回の仮説)

どのような支援を行うかは学校長と協議して決めていく必要があるが、児童生徒のサポートを行う要員(タイプ1人材)が1回の授業あたり3人程度、タイプ2人材が1人程度、合計4名のサポートが望ましいと考えている。

<共通して必要なマインドセット>

- ・教育や地域貢献に対して関心がある方
- ・指導員や先生の補助要員である立場を理解し、サポート役に徹してくれる方
(個人の考え方・教え方を強制・強要しない)

<タイプ1:児童生徒のICT操作補助員>

- ・パソコンの操作が行える方(マウス、キーボード操作)
- ・ブラウザの利用や簡単なソフトウェア操作ができる方
- ・想定する人材像:業務にてパソコンを利用している事務員

<タイプ2:児童生徒のICT操作スペシャリスト>

- ・タイプ1のスキルに加えて以下のスキルを保持される方
- ・パソコンやネットワークの基本的な仕組みを理解している方
- ・パソコントラブルなどへ主体的に対応・復旧ができる方
- ・想定する人材像:システムエンジニア、もしくは相当するスキル

4. 11月29日(月)の支援状況(2回目)

当日は担任の先生に加え、専門ICT支援員が授業を進行。(2名)
そこへ、募集した地域サポートメンバー6名+村上校長で授業支援を実施。(7名)
2年生クラスを対象とし、支援メンバー7名は、1時限毎に隣のクラスへ移動し、サポート。

タイプ1人材(一般) タイプ2人材(スペシャリスト)

担任
ICT支援員

1名

1名

校長先生		1名	
運営協議会メンバー	(3名)	2名	1名
片瀬中PTA	(1名)	1名	
地域サラリーマン	(2名)		2名

5. 効果／分析

- 7名がサポートに入ること、サポート要員1名あたりで5～6名程度の児童生徒をカバーでき、クラス全体をカバーすることができた。
- サポートメンバーも、1クラス目は戸惑いが多少あったものの(操作に不慣れ)、何度もこなしていくうちに、4時間目には全員が余裕を持ってサポートにあたるようになっていた。
- 授業開始時のログイン時には、対処が難しい不具合が発生することもあったが(文字入力不可など)、対処方法を覚えることで後半はタイプ1人材(一般)でも対応できるようになった。
- また、授業が進むにつれ、パソコンの使い方支援よりも、次に何をすべきなのかの授業支援の比率が高くなり、授業がタイプ1人材(一般)でも十分にサポートできる内容である。
- 稀なケースとして、パソコンの環境設定情報が変わってしまい、その場でスマホ使ってインターネットを使って不具合事例を調査して修復した事象あり。
(滅多に無いが、発生時には専門ICT支援員またはスペシャリストの対応が必要)
- 授業の進め方が、児童生徒が横並びで一律な操作を前提としているため、誰か一人がつまづくと(パソコン不調含む)、全員が待ち状態となる。(担任一人で教える場合には止む無し)
- サポート要員がいる場合には、つまづいた生徒・パソコンのカバーをサポート要員に任せ、授業自体は次に進んでいく授業スタイルの検討余地もありそう。
- 操作の進め方を、例えば模造紙や全面スクリーンに映し出して予め示して置くことで、先に進める生徒は自主的に先に進めるなどの工夫も取り入れる余地がありそう。
- つまづいた時の対応方法を理解している生徒児童も存在し、担任が一人一人をサポートするのではなく、4～5人で班・グループ机にして、生徒同士でサポートし合う授業スタイルも有効な場面もあると感じた。

